國姓爺明朝太平記

五

特
へ 13
373
5 止

國性爺明朝太平記　作者其磧

五之巻目録

親子倶にひかる涙は紙の入羊の糞賣

鎧りハ人に雇ハそしる陳芝豹

容ハみ弥どうりのと知る國の歟の女声

歎の不足ハ子がいとハされぬかこち草

養ひ親の心の中わけも又去就の蓋

擬顔は像大石大輔は果報の基

落人と逃さぬ門の戸に拵へ置く基の万禮

邪智に勝まで鼎の宝も食ぬ王子

喉分の兄弟も実ても椿の娘

関などの気の二階の境をまゐ

親と子の縁切て出した白髪首

孝子は義理の実子は他首

一筋の首　河

親子に縁びれ此間に紙の入筆乃紫炭

さぞな石門跪が逆心露顕しておのが手勢引連六手籠

る鉄平と二つにわかれて宇都の関に立て籠り。狼とおびやかし

民屋の財を掠め夫人此女房嫉むを狸りに嫁戯をかこちし

科なき百姓をおかし。女に執着つよめ女を掠をもつて酒に弱

附割遠ひの言ぶは首をそぐ首筆へあげこみまぐく此悪逆国も

おそれぬ仕方なる無法非道なるによりしも法そのわしてみ

おのれまします。やつまちに急に攻滅さしんは又小狭の残党国を

より数万集り一所にあつまりて敵へ責寄んもしい大事なり。

と其軽ぶの一内通書を寄ませ。其身は二万の軍兵を率して

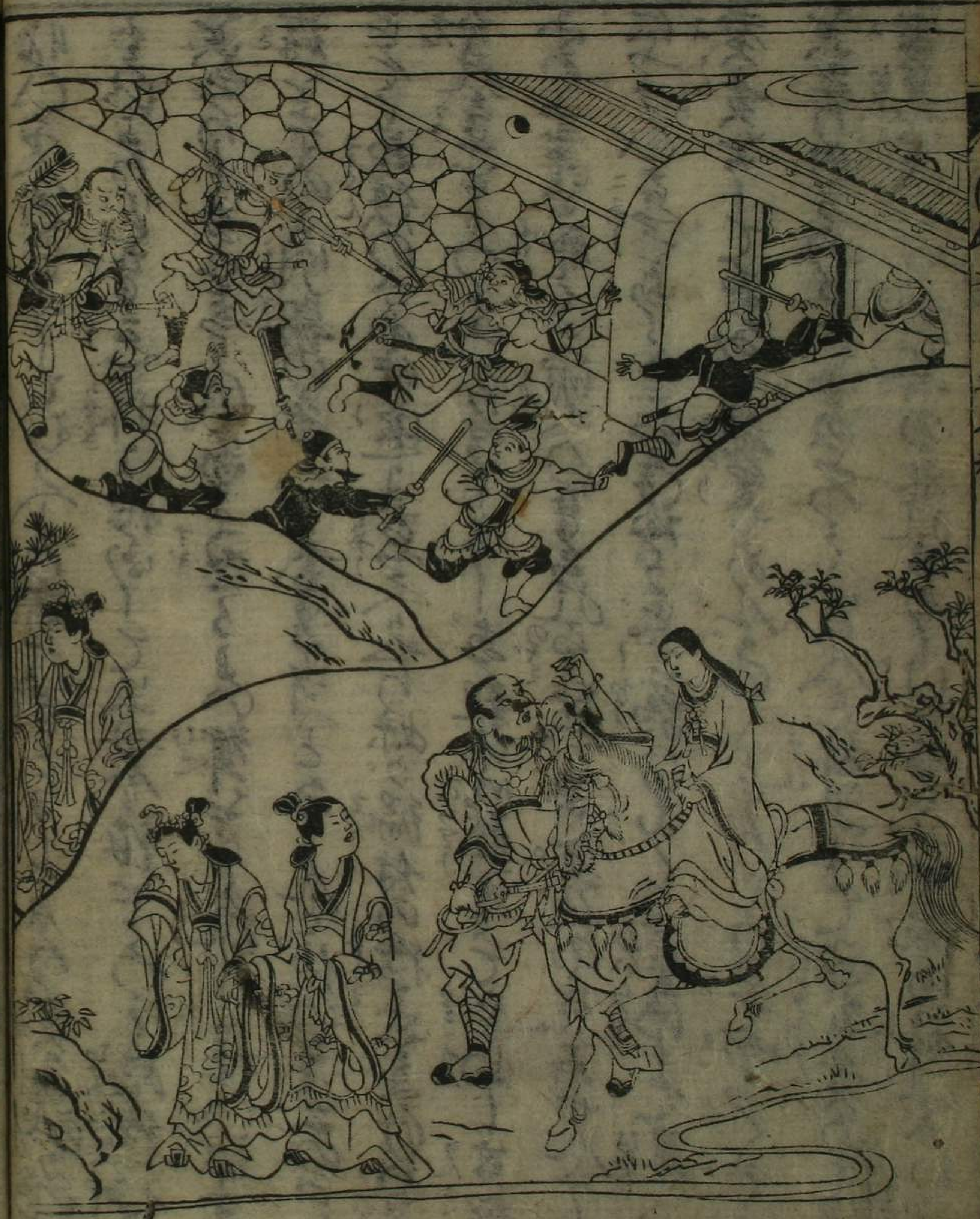
宇都の関へとおもむきその間の鉄平宇都宮へ美に屯く民同

さればこそ母ハ此画像をあらためよと事ハまづる敵へ心よ心をとらせたる
ハ神よあらへぬ国性爺急ぎ軍勢をもよほし大明天子ハ浙江にあり
其時石頭城ハおくせんやが籠りたりとうかゞひ父ハ急ぎ金陵の門表を攻
さらバ一と番々をかけしよするんハ石門城ハおくせんやが本陣と定
やりあや甘輝が家来をひきいて出陣する所へ又にせとて目ざすを捨さ
あつめ手ぜんき生れ中の大将号しおげさる池州をつくろいく島ゞよ目ざす
へ責かゝる甘輝おどろきさ金陵城の勢をそろへあれ此者あくせん
きさうく家臣共へむかひかれハ吾身の家勢ある甘輝一人門へ
たゞしつまれいざとれく不知をするもしてしく十二の門ゝを静らせかれ此者
ぐしきさ大将とおくハ申せんとおくこれ所へ石頭城の軍勢門々をか
湖のまくとどくれいあやのく入れハ皮軍倉ともどもて是を宝鉛と書き

残る者共凡大賊の勢井大将ハ酒宴にまで宮中を出入せしが府ね軍ま石頭城
連類によく寺れの賊軍をも下知してつまりぐの後けんたゝかへ入く
せんたれハ味方井つどもの玉関老人ともそよ多く仰ぎよ逆臣
て今は出づからに甘輝の手並よの廿余人のこれをうちとるれハ天下よ
かくよかんどもちからなくて主上を龍の鳳車にたすけのせまゐる
せんぜん皇女ハ女房衆栄女をつけいざ下さんと東寧の府へ
そろはまれん我よとりしひまかれやとそ廿余人此老に前後をまもらせ
かんさんよさら敵備へ金と陣勝門の所にてあるをすやかくつく
あつく天子皇女を守護して是よりまゐらせて故にちまりの其子雲南
国境石山の麓よ陣をかくり今は越の方々へ八城の勢村を遣し
其者軍ま甘輝が妻女孫栄女が妻もろとも親をかり住吉郡まで誘しき一

唐の宋烈皇帝の御世乃時勅勘を蒙り日南へ左遷せられ
母なる人二才の娘に乳母をそへ黄金百両つけて陳芝翁にあつけ
おつかハしとて其身ハ和州生のそとゑ陳芝翁に附ハ所によしき
牢人のおほく家来をおほく家居をかまへかくし実子のごとく
妻合せの年のとしを若代乃鬢を見そめて父母は婚姻を
事にかけて婦しく深窓の中にやしなひしが田舎の嬌ハ錦にまさる美麗
天上の桃花の暁の露を含んで塩よりもなを一枝乃庭にあらは
れてよくあり二八の花の露を其精はのミぞよりて見へひとえにかま
嫁娟をもとめ妻にせん事世のそとなれハ陳芝翁をおもひやり代
あくなく金銀をほしきまゝなれハ夫婦一生安楽にくらさん
縁乃結ん付わたるハいのちを嬉しとてまさるへし左遷暮らして其耳

胚ひ金をあつてむかへとる宿の妻とならてなる実子ならば万ハ
未はようもなしと称よ他国して父母金銀をとゞくく娘孫孫
とおもひし事を悲しむ。家によろしき聟をとらんしと胚ひしハ其年
暁をしての三明朝の帝へつかへまつる才とうるんと他のまちの口を
とそくお経の云々中途に高くうら妹が縁付の様子をきけハ色
ゑん金をまうくるつかせし。両親の吹聴をきゝて赤面し耳穢
ふおの事を恥く大明乃ちまちの宮をやめて又他の主につかへて
にてさひ志を出く三宮海を芝翁いよく客落して半乃
委妻をして遠方く村里をあんぎやくとうりあるきてそせかくを白
とおもうけるの秋小女ちうく実人も稀なりて君ニ奉あまりの
葉草をかきわけ付合の栗の木のまあひしける里、一里塚の校本の



小蔭をおやして妻海の猿をあつめ数多く勢男ある西の猿猩
女はかんざしとりまはれ稲臣皇女を估して硯石山のふもとへと
まうろさし蝋人の身のかすめしかば爰は辻堂中祠の影に隠れ
秘よるれば出くなとものぞ黒の犬のおどろき声な猛をひや
なかの男乳児の百も臍ぞろきておそろしくなりもあるも畑の
畦をつたひ。彼方より人を出づまつ付けるはなかなか出くあまあるくん。
つゞひぞせる所に廿日余律の月白く一里塚のあまちかくと
火九を見る影の角頭巾にてある男の。もとあるは。見ぞそまうゑし
とまさ追剥あらわし猿猩女をむまてとへて丈の肩んのためと
てまうよろ鋼を見えもみ。ちぎさはからは類切らんと皇女の
身をのしまて図もりけどとまれは漳芝郷見てこつまる

あまてらちやいお仕舞の大黒前の安着寛の酒りが咽しいと嘆
ろ気を待ていくつぞかく気はあるは今朝かお仕廻あるてかく大猿に
あは仕合と見へまして御供はあのくとちがひし青の御仕合ざぞ
のころごろをまのつく下されまして表へつぼ参らのあねとの秋より
あまとこもいりて無縁まではかでそろへくそぞへされは二人の人をされ
ぬらふかてん中ほど。月影よりされはよ年のおやちどのじやが秋ふ
けくそこみは何してゐるまとこと。いは芝郷皇女の夜装をすてく
見そてころやするをのでならは上官えんぞや。どうちへござる御のまれ
おそいが親方の西へお油のりましもいあるの身えやどろく金せを
とのは。猿猩女まではらは猿のかりの硯石山乃ふもとへと
どうちへいそがで見てるとこへはいゝ。ひさしく秋来は硯石山の

ふたとの君かこれが方へおくりまゐらするおん文ぞとて人ハ見れんくハ縁
芝翫といふ人とのかれぬえにしのほか知らず人ハ芝翫方とおくられ
下されとたのめハ芝翫打ゑみひた心やらねばことわりやう
あらこちハ律義なる旅人とある由へ真信なして筆の黄葉やう
すゝハらでゆかりこゝにとゞまらぬとの事やと小ばなしを立る足
扨ハこれきこの文翫よくもなくして八娘の縁結女ども在中とて大の
の親とも見えまされまして由なしてと下さりませとまとおかよハ
芝翫よくがんくく娘の娘さやう女の身とて家には親の面
あるわりさ何用かあつてまた一筆も今ひとり女中の見せかわ
まハ寛輝の家か後世とて秋く遊女の万宝を胴まハ
あそく商ひをまろ由へ娘とさしたる兼おとりひしか我身に伝

あとまあかハ寛輝なまさてまして来さの身からすへれへおかげ
にさかりへよき事あかりふ血をまけぬなまれハとて二筆かて書記
肩さて親あれハ在所にさ実の親よりハ其の親すつを立て
堂寓寛輝公とて一族の屋中とあそれがはくの女中はかぎ
つまさまりけハ歓楽およそ身ハさらし親の所へとて八盃正月に
実の人さえ一ッ越ぞして伝られてもあかなきれハよくもく
類のはれあつひの粉て八事さ事ぞかくいへハとてさうくふさう所
とあつしまづさくさの子親を立んとく一生涯されうさハ大あるりとさ
もろ親子の名とても又さふ娘のまあいふそて立まへ一ッ物もんさ
のこらぬ世の中の親のあつひぞまりふるそれ縁縁母胴をあかく
世界の女のまらひとそてまの心をうかまかうせみしてまへ本伝也

ぬすらへの事なくは人へハ。お国よからへなるくれにあらはでハわが
さいと寒しおもはるゝも親里のけてかへらん方をさくめんぼくなし
事なりとかく親にも申してはやく此道をよく付合也
まことに夫婦の和よりおこりまうて来る事なりとぞ見よはらせ
西ハ姫方ハ和くらし先帝黄帝ハ堯帝娥皇女英二人の皇女に
ト嫁ひさびしく瞽叟頑嚚なるにて天子都を譲らんとおもひ。まゐらせ給へば
舜は歴山に耕しておはせしに帝の二女をさづけ給ふ。山からかたよりのかれ又よとをそのまゝ
せんくん女房は吾とおもとらん人あ。おかく帰りはなく日は流れて
とくさハ親の仕ごひよはまして下されし皇女の事とひとへに子を教へ
まうと思ひはやくハ。さ之弱は枝の下よりもまゐらす子をなさ
ぢんすらのふたとへ親もとくまゐらせとぶさ子と親でうけまへ

始むりてごまいとちかくれおとおもしてまゐる心底が千金にや他
人の目はふとくさして始をふる事とれぬかふよき方をおもひでをも
別人のまへあがる親ハ是中にもあづくひきとるる女房は身のとへハ女房
ゐがさけとるとまことにとよれくれ、力業をさまさいつ今時のよろこびをのお
中くおもる事でありしぞ内に夫男方の兄弟礼を立てまいらせてかへる
でおいふがまへ身を絡絆女の親ちあれハ此抱て甘ぞ子は家業
を国よひ世おこれつぎのあく此なり、白居易大事神むるひまなくするにハ
国のありさ此時亀おそれてまゐる母とそのかゝめをとしくらし女と亡者
譲して立ち行の家内治まるを守る女らくかへりてそとのひかれハ女房
よわけ抱と今の身の上で、よあるとわれと死去はまかつら人が此
弱なく。行やうんあるしはおかりて始をといと言ふ。伯加ら持てあへなる

おもやうをかはりし對面あれど人ハ芝龍かんなうして。先なる人へ
正すによらずとの世孫錦舎といひ誰人ぞと問に入て見れバ。さて夷狄
ときはし老一官嫡の孫錦舎をきよるといひつたへしはとかくの
甘輝がけの末なる嬉びの一團龍菫の縁よりけしくおもへし女房の
ことそなしなりにけしう嫁の火をおこすがうちて錦舎に喰せるが
ら何と芝龍命あれハ再会いたせと。そのうへおれはこゝ下さまやうなさ
よりハ年がよらぬ。日本へ上らうてとそうて、本をあたへ。又りこ
の事にへかうつ昔をいてとも。手倒い忠かく後りかたうなるが二月の
二月より二人抱くのがやつぱりまあつて。身をかりあへ三宅にて菜を
子ゆゑの娘ハ今ハ大分仕合して。まことにおもき御義父の家
ても早今國義のいせらしてまり孫手の事でござると錦経女

と親ともに名残をしもあるべきところバ書文の事がなしと言書て
まんざらあはぬあいさつ芝龍むつとし。一官も身たがい人ハ着ハ附る
経孫知でもわらふ抽とものむ人の心よりけどもおれハいつてでも料ぬ
男あるをこんもく問にはひろくひわがわう。そんな伝心なる人を一夜もお
宿申事ハなるまいぞといふや女君と夫婦ふ亀に嫁錦経母のかく先
帝付し嫉妬さへおはかくまはりし表をどさう奥へいざうひとりせとよへ
ハ女房おどろき表へたつてお嫁にもてなしやう遠情やうてま
に潤で袖をぬらし。家母ともになきひ門に入ハ一官夫婦の肝をつ
ぶしてもハらひがけなきあそばくるごさ都をは羨しやうも
やとおもつともおろそくへバ錦経母もかくこのまでおもあひや
事。江の鼠嫁の縁つきぬと申抽とつきみなあすして捨べ八一官ハ芝

貂が濱ありといふをおしてろの庭のほとりとけしく隠このところ行わ
其とさへいつて陣をまなどへさと其とふらいくかりにおゝの岡陀
ときはさんとてへてもどろみるの外中をそのとしなき
親子乃の中将もとね其将れ蓋
出世ありて古今へ海にねハ務を其そ物の行がくしといひぞそも
陣是貂が二子方れハ此ふび龍範王の嫡子阿克嘉安へ
らき一るゝ阿克両将よ対面して力も智謀勇力ある
しね器量者と天将めく即時よ大将軍の位よすし西難節
がたくさ語あく勢をとるへ五日后へよ世事よおし出ぬる時ハ
人を斬ちるれハ其方こゝのちやくむらく一時に勝負を決せ
と三方の勢をさしつけそれハ両将もろハそれがしきのよ各大将

牢人れ身なくいやしく其せし者なりしれ趙大将を仰付らる
事身よあまつく永き事なりし其一人ある徳を身し大将こゝろ
うりとも安くせんやとたくりいて此度軍功をとる事ハかなふべから
ずと其段ハ其よ此事とおほしめし牢人よそよぶれハいふ君命よ
て大将と仰付らる元帥軍勢かろしめおかどりて我下知を
ち更へからとこそも書とさ此度乃大将よまもろへくお頼しめし出て
君は寵愛れ出仕の臣下れ人のうやまひうろとむ人を我よおもへ
軍ゑ行と立おへて御身へからんと下よろふ此義むあやりと阿克
両信伏して馬徳光よ一万出兵人をおそへつわしけるよ一方
ゐ徳光よあつていぬるへ四ろ年れよ剣は軍門へ参会せられよ
卜さでて事ありと堅く約して立出られ翌日よなつて急兆行て

る施徳光を待しける施光もとより威勢に誇られハ時宜の
約束(やくそく)をも大事とするにもあらず親類一家の餞別(ちやうひけ)しおくりける酒盛林
まひまを入むらく日夜を過しぬ。かく陣(ぢん)へ来りたれハ万徒(ぜんれい)太よいふ
いにしへより軍法(ぐんはう)に大将たる者ハ君の命をうくる日より我家を
わすれ陣(ぢん)にのぞんで約束(やくそく)ある時ハ我親類(しんるい)をもわするとぞ
老翁(らうと)をうつくもしむ時ハ我身をわするといへり独りに天下に
まへし猛将(りやうしやう)国姓爺(こくせんや)かゝりへまづしよりとると万民やすき心をもち士卒(しそつ)安堵(うろ)
したれ陣(ぢん)にあら。其家も秋の風もおもひあらど飲食(しよく)さへつゝしみ
おもねまりて親類のおもり来てもなむけあるをとて酒宴(しゆえん)に日を
おくり軍法(ぐんはう)をたゞしへ此事をきゝてがめて給ふことそけしも威勢(ゐせい)
其しるる施光が首(くび)を切。三軍にかくとどめへかれ(きし)ハ諸軍(ぐんぜい)勢

おそれけし牢人(らうにん)ものと駆(かけ)さし無元吉をかはひ大将軍万札とお
それおのゝきし下知よ志たがひ軍風よのへかと兼(さき)けれども御かたに
へとのミれ老上海りくにまかりハ国姓爺(こくせんや)南国へよせくるとうし志
計略(はかりごと)おそく実(じつ)ハ金陵(きんりやう)の都へ兎りけ。大王并に海利(くわいり)王と戦(たたかひ)んと
れ揃(やそろ)ふまでハ光ハ新一官(いつくわん)書子(さいし)おの好来れども西へ向て敵の戦
乃附おくせんやハ宗(そうかうくわうてい)的実れ六王子を象て西向ひ内裏(だいり)の軍にお
わざる也へ親書あるを申しやうりとしとありく金陵(きんりやう)の都よわりやせ
んと思案(しあん)をとるふかく遠ふまつてまつりあちるさ南京を捨て
金陵(きんりやう)へよると兼(かね)て其(そ)ひと速(すみやか)く敵を亡(ほろぼ)すへし万徒(ばんと)沢才をかへみ
いそぎ弘光(こうくわう)高(こう)のおよ西さとの元の君か為さらで攻(せめ)り揃(そろへ)て
隙(すき)とをあ猶よ陥(おとし)。宗武義(そうぶぎ)よつへく寛兎(くわんと)の事をなすべし付あへ

霍親芝翫と巖獅ハ實留力なくひ人ハ。親としてハ芝翫と志めし
あわせ耳獅をとろへもとめて芝翫とあわせ。一家のよしことを
志らしまセ老一官がの来るまで芝翫をひゝとし。隠れかる所存
紅くおどろへぞくと示をゑろとのけきせをくれ一官か身を隠を
玉へとせ面をさつ官とかゝめとつく楠の面よ引きへ要雅翁とうへひ
夫ハ老ひふりきあくせんや。親の弁ちらくさかんくかゝすしよつよく
隠禾住るが又ハ親よまひひの旦し武勇由ちをて我をぬきぬ示をなんを
りせ三三三よ丸のけかハ三は由吾ぬのまくせんやと生捕んハ雨室
おくひる親よ八義なくれ流いと友を下さるべし。古ゝへ立返り又乃孫
芝翫よ對面いさし老一官を故郷とわ縁を住りんや良ひと示終
乃迷りを申しくんハ彼克角色を度て大をよ恨び。縁よ青ねん針

あしさびへ海の彼が親とわ縁して老一官と海を申うれ何の無益
とあきらとべし三刹いと母むろのかせハ万徒を成しとてもくよ蒋
由へかへ月しの古ゝへハ孫をそのぞくかへるといふか文あれと衣冠
を淋くろひ友人へあしつま威氣といかゞる、て立帰り棠れ古乃
前おしてるよありるを関より女房ちらつまとなんて我子
乃万徒が立所をしく海りりしとふ八ゑひりろど休ますまで由
き斬杖へ丸家よ皇女を葉を一官嫁子とかつてをきぬの事。歎
私方へとれ吏へ歎れ大ね食儀よ本ねふうこうひよすしと妻れ芝翫
おかくやまきてかくとてハ陸芝翫をろと毅をきこえひくまるくさけハ
きいかんとかって申れと実ハ吾變面へやうちらしからいぞつろ
のころ吹也我三ちとをるびーせ今ひ附の華とんくさうつれや

一つには皇女とふむつ。つぎには一官禅舎淑婦女。それがしかく入
蓋ましてめまへはそうきぬ都ましてぬすむ一方れ
いつくにか安ぎまゐりて首を並べて出世をして子のしを
れ衰をさらのされは二ツあらは二ツでもつとも子の中にしき弟を立て
嫉しひれをつらにけり。方様の子をこくやきるる家臣の今これ其父なりの
師ある人は魏の王かけ嬌子阿克衛の女大人とて小房の名ね
余しかいのなり衛孫やとらん鑑功の父のこれ人としての新家の私を
登上大将軍の位よ。二万の兵卒をあつけしかのまに心を付
ちはもの一ツのてき流石悟莫かなるき仕合せあてはいかなる恩を報ぜ
為はいのちもすてゝはらくせんやといふ奴が首をとつくなりの主君の
寿漢をたちさせやまんと曹操帰りをまちて一ッ首でかめて

ゆにおくせんやとりるものを力をあつくまんとして味方に軍
兵を換ぜるでかけおもく勝利をゆる事なるひがくて。さるふよつて
私斎計を主まし。大切に衛をは鬼神のするさうちくせんやと
ひとつのと仕りさうてんまなる事まに接つくおはへ。びきそて
とつくおくせん屋ハ親上孝なる者ありて色て内裏の軍の嫡
より文老一官が行方をしれぬなれんじ救ひ飲食せつく勇猛さ
まる。そのべ切としあすのまを語へりあり。又一官のまに生命のしれ
さるハ若き主陵が初まに生捕とやらすれん。さりく金陵へ押よせ父
の生死をかちらけんと主出出張れまちうえんの城先をましと一陣ま
金陵を責んとせしかを軍のつけけり親のまちをたつるんがため
相見れはそのさず尾かつり。出来金陵の都へ人をつかわし味方なす

ね海州王に一官が筆しるしのまつりしうへは。其後一官はかんきと
大王の帝と書きし旨を示しまゐらせぬきかれを応じて風聞ある
よし申来るのちく。呉将軍は尊輝と又は害せん姫によつてぞ
縁あれは兄弟にかんきが王面と称させ申かんをうけあらせ親族の
事うしなはぬかいと云せがまては一官の内方をうづまをとらへ申か
ハ遂に其れ申さん。帰る氏づて去れ申しさ八年参りて一官を生捕
楯の内をそむけあしらぞ。おくせんやが城へ責かかりけり。主君の命
姓名氏。又がそこはまん〳〵かるしとうひく心もよわくとらへて。縄
は陣来付りん。手をおしのせて生捕かして大将がは関に魚人
不来いうし。氏計略と書めし合さ申さんとある密書の中よれいとる
まと信じ存し越には百何とぞかんきが王家を他へ出しかしこく伯面書ま

まあの三人とのへは芝龍もろとも我存と国主関に申さん合あさされて撫と
をいかさ申しかたしてあつく芝龍いへるは。しては方あくせんや
を討ちうとは此上すかく又何者の方にまさる事をと称子けまさえ
されは去功業夫にまのへは万戸侯に封ぜられ。あくせんやが切とつ
よる福州の主となり。すまも出千万石を取て大名になるゆゑ也。
はおん親は国主れ父母。万人を安く民をおき筆記とのとき申
との人は芝龍がわかけるみつとると称ひしめぞよいく尊輝が主
所へ〳〵とつけは和主まづ去軍をやく今上は存義只命まそ
儀由りとあ申く民家歌は一宿ともまかせてとこの家来を主君
こ海ぬ世海一人芝に宿せよ。家とせ先後合せんとの人は出合らは下人
たは主なま前をとらしやまさん。れも屋の中は見さ宿へ来らし

吟殺に入ては夜に来りけれとあれハ出家をあしつまさ
富とりに出つる書れ女房芝翫によりひ。あるこれ今のひ
ぜんハ諸き毎れ事をおりやうれ親子あはをい出けるとりかでんととへ
むぜちかな哀子と大名ふして親をまぬ老のうへしきさする事を
嬉ひのやう。出れおなを悴によりかくまひあハせてあくせんや
ぢ代よあるれハ敵の方れ大名へふびんはあふ残より乃方程へ討兒
きとりけるとられてさびさうれ繖つまかゝるうへ天地の間よかられ
てもを腹にあってハさうしもされぬといふ事ぞへいさゝと大名
あつてなるり殺してか繖つまかけてなくらの。善悪二つ此分別弘
ぢ。あよぶむ〇とと人を徳よあつくさうハせまハ彼と後悔で
かつらぬ所ぢや。一生一世乃大事此思案をおとしつけさんべつ也

さうあるくよさんなまぬハ二世との人ハ此世でもさつくふあつくも又来
世でおかた〇ハあらぬ身ぢやどふぞふぬえをちらが別沢身よ身を分別
さんあう事ぢやぞよぞやくと拝をむされて女房ちくはしいとしい子を
大名ぢとてなてふしふさよあれハとそ殺をうのうふしてとうけれを
いとほしけよ嬉しゝるきすふて訴へさとる事を傳ハ嘆ゝゝ
まあとうぞやどうりある別をあかまるまふうぞふとん一望志てまよ
お別とあつて〇ハ芝翫鍛しつてゝ汁と女れ泉のさん留で由く事に
あろとのとりれ気ハ悴の又事くえぞ世なあらうとされハまちまくゆねの
中にさり錦何女一人ハさふ事あれハ色へよへと女房よりひつけ。程楽
女ぞうり出ねよりを出ちゝく〜まつ〇とそ徴が見れ方様ハ歎の方へさら
ましく老一言るときがつよ廻りつのぞもよ立参るたをと学出とお思案と

弟は彼命に来りて安々とありまし当初の中でばつゝみん子を大切に
まで親き兄弟の栄花弟まで守るやらやば又一度をかりておかせて和子の
ほの某の舞を楽しみ[illegible]やらやば一つの所の前へ参りてとよびて彼合
まろが身のと血をまけし実の兄弟と夫婦にておとよろこび又二タかり
小夜嚢とつく書肩まで書ひ親を大切になとよふのぞんつまると
ある(も)の取るも(と)ある(も)とある(は)とある(か)をおくせとどつきと大切
まふしてもあち今の内ゆ身でおちまぬが別の住処のある事
ん底へいふと足へ縁付まの中の書見文を大切まといつくと二者をかりめ
よつて一日待よふと往ける(か)でんせぬといふなせ又実の親を大切を
いつで親の子やうの者へ娘かれかくまつ事のなぬ程は落を同道で
ある(も)をおもと過ぎして兄も右の候みて[illegible]まつてとるいまでせんとの

しかる難儀をいひて主君のきぬ所に家を立ち
あるとの別を損じくるを参くつ親を共にしてやもおいて
とりけるの中をしもかられくるびんする事弟あり
咲命の兄弟をも実をも損まぬ娘
血をかけまし産の親の国は山よりもたかく嬰児の時より書肩
れあづり書親の恩は蒼海よりも深くぴと〳〵君と夫の子
みでをいひまさるとのづれといひかくて縁組母は今日方へ又二ヶ度と行く入て
子節がまるにしても主君の家来衆か(さ)やかさ(の)兄弟別家をかさぬ
てれまおかる事の又まさ起事さへ書親は弟身まそいまして
弟従をと大名の家之れとの名義まといふを子をとよ親の(はら)ひはいて
(子)孫どもの従い一旦かくまひが親の弟のかるもう又弟の教も大名

ふとりかし親子にしてもまよ菊屋をとりあまねく出来まつへさせでは留守女
一家中を此場をかつしおかせの心。万兵衛も今日よりあらためて立身を遠
。さつえんれ女をとりそて今より家女と母の此時方をちうされ此人をとたち
さゞ渡れなくせんやうこゝ外よりもひなさんこゝもおもくせんやあとられとお
りて来るさんをおれ。ちかへかゝるわけ。ま八。爰此月れかくまへかよ此一
多を立文となくせんや代よ出られ此万兵衛をも此志地よよろく大禄高
友ととゞつり大名よあるのみなあらどや。志られ此新兵衛の武家の家の色
しさ承世る之筆くせ又へ今さえ。今又万兵衛れ細よつりく落れ人くと離
観れのよ思うとこゝし万兵衛へまきされたる時八。子よまあつて武士の家
きとされかくまへ来てりへくと敵れ又へ且よし方兵衛人れ此武者
のとなく無名とされ縁りん君をへ富るを制どゝされまわれ

中八出る家親れおるのこらん事とかなふしく大切がおまつや此へ今
青万兵衛は出しおくへこゞうし升よおらせてあられ此石程をや此吹人
ともて大阪の方へ此使方をせよ夜ぴと程とてしてや出されは元来程
乃逢是弱そ。此程色ハ君うる別一女れ若道ずはおうられ働さう
事かなくまとおちく感心しけ出楽よ色べうさび。志ったは出乃今を晩
ともの世話の中よ入事さへ露路をまとて母るはせざらく九二階へ上
まぜ万兵衛が細ぬをまとむかへ生れと云へおく母をとつゆるおもしくさ
二階の猶気へ。家女ニ情出むつ恋やうをまへせ秘稚女を更弱出掃へ
万兵衛が入来るを待ちのるまぞそは田も一つも袖取の縁をつくらむ万兵衛
一人ひそかに来つ。酒よ入くさへまあれは若よれ秘稚女子覚ん云敬う
久しやと云つつく涙されば万兵衛れ千をつかへそらへ耳熟方へ嫉妬し妻女

こなたへくねるを守護しけるが正面へいつも奉りしぞかくごしやうせんといひけ
る一官夫婦親子つとつて揚子江へ越さんとせしが何とかくさふ今日迄が
渡合せし老一官を先ずあらためくせんやうが妻子錦祥女が縁により
て甘輝を頼みのまゝにて国へ帰る事思ひかさなりこそかゝりくまいかせ
ありそれなりこそ海まつりんの夷へおりつきぶくせんやをせめんとあつ
昭いまもとの錦祥女が妻が拵よそながら二人の母の中に入りこせ候ひ
何方つも語んとの母へ和藤内あつて二重あらが何とも方今日より
悪逆あくせんや方へ味方さそ皆の人々を親を方にたまひとつみとも
つらかくまひ大明の代々よし一まりあつて方で大名よるなを大内
方々を先さつて南京の忠義を請て上へ今さまつて世を御り給ひ
親子夫婦は明朝の正統とありかれ同じ栄花の身とならぬを渡
て漆足せりき手を国元時は親は大明方子は日本つ勢と三ツ
出生は和藤内二方とも武士の去るひとぞ親子兄弟方子別るを何の是へ
事あらおらす先それは手本の主君の事世は日本の皆今の事当れど
更に久しても一かくと親子不兄よまず是今表つて大明の方へ御
味方も世とのひ入それは方私通りまは文化(?)給先お國へ内捕るの男子宵ぬ
とりせとも方孔子へよん五常軍韃靼の荒商人達は是も二ぢ名
ま言之れ来せし東へ御の剛で皆世大将軍の
任と思その皆りさみか云さむ事ある浪人の今日かかり立ちしさ(?)
あり一と唐で日本の孝子忠者りとのそ勇士の武士八ぢんと惣せ
きるぞいく義とまろと手り此へは他へ素人見ひ二の足ともと
武士なそのまゝ文流有るべ二心をもろきまり一つ二性根の弾とも泊まる

縁とあるべき所よきた仕官の人もなくれうきれ不義をしとをめるは
表には情けあるさまにてその親をしてまさと云義者たと世の人にはよあらせ
おのれの忠義をまもりけり是かれが第二の働きを仕ると云人孫更
といふとやうにぞかくまひまされし者一官を書よ謀の手柄をせさ
せあらくべきもぞ親流の莫大の恩と孫安は寿の娘の抜きなは寛の子孫さ
は趣くれずもさとてられ一官をおせさし下されたるは新はんと色をさしう
去てかしたれ芝朝にて今法なり事を又公親かのするを以て内同じ也
理るりぱ我深の詞はすてうひろを哀しかくまのあいふって官をも方へわ
うなぱる君命にすてうひ一官を手柄てあくすんやを浮ろがまれさころ
忠功の臣と仕我武士の勇をまとれ。このまれから約を褒じてかくまみ
し人々を感れまへまうしろ非義の親なりし指をさして知るべ

世の人の耻をうしろ指さらせてあの大を方へ手柄せしとかれをのと
いられて何とふかる者共は又其勇を揚て又其悪をあげもとさへ
つらふ又は悪者とつけくもの者は恐のものとらぶれえらぶことのまれ
かくまのや人々を我存命の中まで敵の株一ととまでし穢多膳
よ入附猟師をとらととへつよるる猟師とらくこのむとよろんを渡
で償へ飛入るえたとなるぞまててや義をまもる武士が悴の手柄とうか
うれしひそかくまふて命を息のうちちまて改して未来と来へ参
らと女ひとろんと云て先も耻を報してまはなは深が存るに往れ同
の是は沖はあくとおぼえてや多れはおれの理を任めんれ一
去一己の悪名出どもさしうつとひておろしかやて書もしてまうは
むご語あるも大義の耻をとかくのほどとも人へどもまゝしく親の名

くらし奉公せよみづからは江南よりつくへてもおろかならず。親の為よ子
のみちよるごとく孝行の道を行ひけるぞ。親に八拙き人を育よりぞんと
妻も絶えたり。今こそ源三郎どのを力にて父と二所に大明の味方せし浦
遠よひとつ稼ぐひねらうるに新参の功もなき事をば恵みの者と
申されしか。父母の仇にまで補せらる。延寿公く殺さる御身によろ
身の為ぬるに奉公の下にをかせらる。かくて此人ハ皇女の為ましての中行
をのかせよ大明方の者と一人趣く。代に殺されける人を江南方
へ送りし是今とての私の恩を報じ主をまもらん為一の一生も乃親様よ
さし此味方仕れハ家の中うちもとも仕の皇女を御の喜こばしに
よくぞ此へ公義を誠ぞ此孫がひめつくりがまにそそと一人敵方へつくる
され下されよ御身よ上するも貸とひとされハ。孫様女房のさそし

すれしき尤かの為に思ひめぐらせとひめしめがへ謀を党に商人とおもへんかみ立
のまことの方へつくハされ今こその恩をもたへされ。歌いらの皇女を我の味
味方あつしてはどいへどん忠勤をもけと今ぞ我内裏へ還御ありしとそ
まづから女と思ひめぐらし又も我実斯がの女房自余の女をとそこされ方
よりかれのふまつらす大切よ御さんならべく思ひめぐらひ証をとと
我と後へ心をとまりし狂ひいさむ心底へけるぎかもえかびんなる事に
豹がりをよろそ自余の者もつりなとそのをも方よおのてハやるる
へ姫ぞらしぞうちを殺へ後しと肘へ血をとけ宮女子うむへのとや敵へ
まことまぢ奉すぐへ喜び子姫君へまさよりけてとまとて世の人を嘲
嘆せられてハ身がニふりりをとうるなれハ行くての終もそれとしやもも叙
なれ尤大明の家来なる。さんの悪よる名を事よるするよりけて歌

此方へよふてと母ハ秋をやましと見とまらせバいやく私事今人に
おやまたぐひ無面をおもふ女君よりれての三階より老一友はさ
のぞきみえてねまるしがふて久しくとびおりゆく身くハ世の縁なれ
氣よまよひ人へとりわきし媛孫福女と毫の子すゝめ縁定め一ッ位
実の親の此一宮が身として娘さまはくるまで元来をんなれバ
のぞまるゝ根元ハかやうし素が事ゆへてあり九十よ寺堂土命ぢ主
此為や去れぬ為よ役よ立つハ身もぞも我と源光商へつくされ老夜今と
背よりんとわるさあ我よかゝるく出をつて一あられハ九十九郡のわ
るゝ方れとむ留一つてゆきないや理をれハ色ハ智きうが大ふるよ
主人へハ忠臣に生まれ縄をかくつるとひゆれを抱すうかを従ハむよ
あぐる源國捨きのひ悴みくせんやハ為りやきとの祇精の西よ傳

かゝりけるまでとゆくそおそれあらハ老夜推量のとよりらひく事
と鉄炮をみとる事をいふくまで如何しく親をたまへけんぬ
よ方一族家あらくもとろんゐ出来ぬれハ永歴帝九ぬ為おもふと生
てを前でも一宮とゆびちゞを親れ方へつなきれハ老夜を尊と親せてとハ其の
急ゆく眉を親れ方へ新をちやくつなきれぱゆく役より出る事ぞの恥上方
と親むぞやさ親ぬきおそハとと我商よそそめてゑゆくとがさ切ておつかれ
うゝうさくまおけんがんつきゆんでさうしられハへくとなけれにそかゝひもあくに
むろうがれ國で説よ見われ右肩うゝむと肩とさて冤掲よ入出右衛門ノ下ゟ
よびて源光商方へつかハし掃皇女出ゆう郷舎よ對面をすくゞ此事よ出居ハれ世
用来あくせんやゝてそてとるたくさ侮へ此伏仕ゟせへとわろをまな振わ落
ひそかよ身をそくろい此浦沖よ帆をあげて東寧鳴へとりそそけるか

国性爺明朝太平記五之巻終